

20th

Anniversary

神戸赤十字病院

開院20周年記念誌



日本赤十字社 神戸赤十字病院
Japanese Red Cross Society

【理 念】

わたしたちは、医の倫理と人道・博愛の赤十字精神に基づき、皆さんの健康に奉仕いたします。

【基本方針】

1. 患者さんの人権と意思を尊重し、根拠に基づいた、安心と満足が得られる医療を提供します。
2. 地域医療支援病院として地域の医療機関と連携し、「地域完結型医療」の構築を目指します。
3. 救急医療、災害医療・国際救援活動を行います。
4. 将来を担う人材確保のため、医療従事者の育成に努めます。
5. 日々研修・研鑽し、明るく活力のある職場づくりに努め、地域から選ばれる病院、職員が働いて良かったと思う病院を目指します。
6. 医療活動を通じた社会貢献の継続のため、健全な病院経営に努めます。

【医の倫理綱領】

医学および医療は、病める人の治療はもとより、人びとの健康の維持もしくは増進を図るものである。医師、看護師、薬剤師、検査技師、放射線技師をはじめ、すべての神戸赤十字病院職員は、自らの責任の重大性を認識し、人類愛を基にすべての人に奉仕するものである。ここに、「神戸赤十字病院 医の倫理綱領」を定め、全職員の行動指針とする。

1. 私たちは、個人の尊厳の保持と生命の尊重を旨とし私たちの専門職を実践する。
2. 私たちは、常に自らの良心に従って、また、常に患者さんの最善の利益に従って行動する。
3. 私たちは、患者さんの人格を尊重し、患者さんの権利を遵守する。
4. 私たちは、十分なインフォームド・コンセントを実践し、患者さんとの信頼関係の構築に努める。
5. 私たちは、チーム医療の一員として行動し、互いに尊敬し協力して医療に尽くす。
6. 私たちは、生涯学習の精神を保ち、常に知識と技術の習得に努める。
7. 私たちは、職業の尊厳と責任を自覚し、教養を深め、人格を高めるように努める。
8. 私たちは、法規、法令等を遵守する。
9. 私たちは、医療の公共性を重んじ、医療を通じて社会の発展に尽くす。

【患者さんの権利と守っていただくこと】

神戸赤十字病院は、患者さんの人権と意思を尊重すると共に、医療が患者さんと医療関係者との信頼関係の上に成り立つものであることを深く認識し、ここに、「患者さんの権利と守っていただくこと」を制定いたします。

当院の全職員は、この「患者さんの権利と守っていただくこと」を遵守し、医療に対する患者さんの主体的な参加を支援してまいります。

患者さんの権利

1. 良質な医療を受ける権利

一人の人間として、その人格、価値観などが尊重され、医療提供者との相互の協力関係のもとで、公平に良質な医療を受ける権利があります。

2. 知る権利

病気、検査、治療、見直しなどについて、分かりやすい言葉や方法で、納得できるまで十分な説明と情報を受ける権利があります。また、医療費やその公的援助に関する情報を知る権利があります。

3. 選ぶ権利

十分な説明と情報提供を受け、納得したうえで、検査や治療方法などを自らの意思で選ぶ権利があります。

4. 撤回や変更を要求する権利

説明を受けて同意した後に、何らの不利益を受けることなく、いつでも同意の撤回や変更を要求する権利があります。

5. 当院以外の医療提供者の意見（セカンドオピニオン）を求める権利

自分が受けている診断や治療方針について、当院以外の医療者の意見（セカンドオピニオン）を求める権利があります。

6. 個人情報やプライバシーが保護される権利

診療の過程で得られた個人情報やプライバシーが保護される権利があります。

7. 診療記録の開示を求める権利

自分が受けている医療を知るために診療記録の開示を求める権利があります。

患者さんに守っていただくこと

1. 患者さん自身の診療に関する情報を、できるかぎり正確に当院の職員に提供してください。

2. 検査・治療などのご自身が受ける医療行為に対し、十分ご理解の上、主体的に参加してください。

3. 他の患者さんの治療やご自身への医療の提供に支障を与えないよう、当院の規則を守り職員の指示に従ってください。

特に、暴言・暴力などの威嚇行為、物損行為、セクシャルハラスメントなどの業務に支障を来すような迷惑行為は決して許されるものではありません。診療の中断や退去をお願いすることもありますので、ご了承ください。

4. 適切な医療を継続していくためには、医療費をお支払いいただくことが必要です。なお、医療費の支払いについて心配のある方はご相談ください。

患者さんへのお願い

医師の長時間労働に伴う健康被害が社会問題となっており、医療機関は働き方改革が求められています。当院では、医師の労働時間短縮に向け、以下の取り組みを進めてまいりますので、ご理解・ご協力をお願いします。

1. チーム医療を進める観点から、複数主治医制を積極的に導入し、医師間での情報共有化を図って、患者さんの治療にあたります。病状説明や検査・治療等を担当医以外の医師が行うことがあります。

2. 病状や手術・治療等についての説明は、原則平日9時から17時までの時間内にさせていただきます。なお、緊急時ややむを得ない場合は除きます。

Contents

理念・基本方針・医の倫理綱領

患者さんの権利と守っていただくこと

院長挨拶..... 2

- 神戸赤十字病院 院長 山下晴央

支部長挨拶..... 3

- 日本赤十字社兵庫県支部 支部長 齋藤元彦

祝 辞..... 4

- 日本赤十字社 社長 清家 篤
- 第3代院長 小澤修一
- 第4代院長 田原真也

寄 稿..... 7

- 神戸赤十字病院での思い出
元看護部長 呉竹礼子
元看護部長 天野智子
元事務部長 中島功次
元事務部長 今井 明
- 研修医時代の思い出
整形外科副部長 森田卓也
循環器内科副部長 田原奈津子

病院沿革..... 12

- 旧須磨赤十字病院のあゆみ
- 旧神戸赤十字病院のあゆみ
- 統合病院の建設と開院
- 20年間のあゆみ

10年間の出来事 22

- 神戸赤十字病院の経営改善について
- 地域医療連携課の歩み
- 新型コロナウイルス感染症への対応について
- 災害救護・国際救援

部署紹介..... 45

幹部名簿..... 51

現 況..... 57

プロジェクトチームメンバー名簿..... 64

編集後記..... 65



神戸赤十字病院

開院20周年記念誌

20th Anniversary





ご挨拶 ～20周年を迎えて～

神戸赤十字病院 院長 山下 晴央

2003年8月、神戸赤十字病院がHAT(Happy Active Town)神戸に開院して、このたび、無事に20周年を迎えることができました。このように20年の時を過ごすことができましたことは、いつもお力添えをいただき励ましてくださった皆様のおかげと心から感謝し、職員一同厚く御礼申し上げます。

神戸赤十字病院は1995年の阪神淡路大震災を契機に計画された兵庫県災害医療センターに隣接して、旧神戸赤十字病院と旧須磨赤十字病院の合併により誕生いたしました。赤十字病院は、「わたしたちは、医の倫理と人道・博愛の赤十字精神にもとづき、みなさまの健康に奉仕いたします」を理念としています。初代小川恭一院長が、「HAT神戸から世界に発信する」理想を、第2代守殿貞夫院長が、「地域から選ばれる病院、職員が働いてよかった病院」となる基本方針を掲げられて、第3代小澤修一院長が、「人の和」を強調され、開院から10周年を迎えました。小澤院長が10周年記念誌において、開院からの発展は多くの職員が過去を乗り越え力を合わせてきたことが大であることを述べられ、今後の注意として、当事者が自画自賛に陥りやすく、欠点、改善点を見出し難いことと、不都合な情報隠蔽から組織崩壊につながる可能性を指摘されました。

開院10年から20年においては、最初の10年間に積み上げてきたことを支えに、小澤院長に続いて第4

代田原真也院長、そして私が第5代院長を務め、地域に根差したよりよい病院となるために、職員一同努力して参りました。そこで、この20周年記念誌においては、10周年記念誌発刊以降のことを中心に記録し、振り返っての反省を行って今後に生かしたいと考えています。合併前の両赤十字病院はそれぞれが歩んできた歴史をもつものの現在の神戸赤十字病院がこの地で過ごした20年は本当にあっという間でした。人間の年から言えば、まだ成人になった状態です。しかし、病院周囲の木々が成長した様に病院もこの地で成長して根付いてきています。住民の方々と同じように年を経て、一緒にHAT神戸を成り立たせてきたものと感じています。また、新型コロナウイルス感染症に対しては、病院全職員を上げての対応と地域の皆様を中心とした周りからの応援で大変な時期を乗り切ることができました。病院にまだまだ力があることを認識し、皆様の励ましに感謝するばかりです。

これからもこの街に根付き、地域住民の方々に寄り添い頼られる病院として、一層の努力をしていく所存です。ここまでに至る20年間を見ていただき、これから歩む未来に向けて、皆様からのご意見を頂けたら幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本赤十字社兵庫県支部
支部長

齊藤 元彦



神戸赤十字病院の開院から20周年の節目を迎えました。長年にわたる関係の皆様のご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

神戸赤十字病院は平成14年、旧須磨赤十字病院と旧神戸赤十字病院の統合により発足しました。防災分野の専門機関が集積するHAT神戸において、兵庫県災害医療センターと一体的に整備・運用されることで、災害時の救急医療と平時の高度医療を担う中核的医療機関として、地域に貢献してまいりました。

神戸赤十字病院のミッションは、ひとつには近隣の医療機関と連携した質の高い医療の提供です。平成19年には、神戸で初の「地域医療支援病院」の承認を受け、紹介患者に重点を置いた医療を提供するとともに、急性期医療や高度専門医療の充実に取り組んでまいりました。

令和2年3月には、本県で初めて新型コロナウイルス感染症の感染が確認され、本院もいち早く発熱外来を設置するとともに、同年8月には「新型コロナウイルス感染症重点医療機関」に指定されました。3年超に及ぶコロナ禍のなか、院内でのクラスター発生など、多くの困難に直面しながらも、赤十字病院としての使命を果たすべく、日夜、医療体制の維持と感染拡大の抑制に全力を挙げてきたところです。

地域の医療機関をはじめ、関係の皆様のご支援に改めてお礼申し上げますとともに、医療従事者、病院スタッフの皆様の並々ならぬご尽力に深く敬意を表します。

さて、神戸赤十字病院のもうひとつの重要なミッションは、災害医療と国際救援活動の展開です。隣接する兵庫県災害医療センターとともに「兵庫県基幹災害拠点病院」の指定を受け、人々の命を守る砦としての役割を担ってまいりました。

平成28年4月の熊本地震、平成30年7月の西日本豪雨、さらに令和2年2月のダイヤモンド・プリンセス号での救護活動においても、救護班をいち早く派遣し、医療救援活動にあたりました。国内はもとより、フィリピンやハイチ、ケニア、バングラデシュなどにも国際救援要員を派遣するなど、その活動は国内外で高く評価されています。

今年2月のトルコ・シリア大地震をはじめ、地球規模の気候変動に伴う風水害など、世界各地で大規模災害のリスクが高まっています。阪神・淡路大震災で国内外から多くのご支援をいただいた兵庫県だからこそ、「創造的復興」の理念を活かし、誰もが安全に、安心して暮らせる世界の実現に向け、積極的に取り組んでいかなければなりません。本院に期待される役割は、ますます大きなものとなっています。

20周年を迎えた神戸赤十字病院が、地域の皆様はもちろん、多くの方々に愛される病院となるよう、今後とも力を尽くしてまいりますので、皆様のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

祝 辞



日本赤十字社 社長
清家 篤

神戸赤十字病院の開院20周年を記念して、ここに記念誌を刊行されますことは、大変に意義深く、心からお祝い申し上げます。これまでの歴代病院長をはじめ病院職員の皆さまの御尽力に心から敬意と謝意を表します。また日頃より格別のご理解とご支援をいただいている地域の皆さま、さらに関係当局をはじめ、関係諸機関・諸団体のお力添えに対しても、日本赤十字社を代表して厚く御礼申し上げます。

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分に淡路島北部を震源とするM7.3、最大震度7を記録した阪神・淡路大震災が発生しました。これにより神戸市は甚大な被害を受けました。当時、神戸赤十字病院は兵庫県庁南側に位置しており、かなり老朽化していた病院建物も大きな被害をうけました。しかし、そのような惨状の中でも職員は被災者の治療のため、懸命に診療を継続するなど、赤十字の使命をしっかりと果たしてくださいました。

その後、災害に強い病院づくりを目指し、神戸赤十字病院は同じく老朽化の進んでいた須磨赤十字病院と統合する形であらたな病院づくりに着手しました。一方で被災県である兵庫県においても、県民への災害に強い医療の提供システムの構築は急務の課題として浮上していました。このように、災害対応力の強化を求める県と日赤双方の想いの一致をみたことから、全国でも稀な兵庫県災害医療センターを併設する形で、新生神戸赤十字病院は2003年（平成15年）8月1日、神戸市の東部新都心であるHAT神戸で開院し現在に至っております。

開院後も国内で自然災害は多発しています。2011年（平成23年）3月11日、宮城県牡鹿半島の三陸沖を震源とするM9.0、東北地方太平洋側を中心とし最大震度7を記録した東日本大震災では、日本赤十字社兵庫県支部は発災後直ちに救護班を編成し、本社や近畿ブロック各支部との調整のもと、被災地での救護活動を展開しました。また、2016年（平成28年）4月に発生した熊本地震においても救護活動に全力であたりました。阪神・淡路大震災を経験した被災病院として、その後の災害現場で積極的な活動を行ってきた神戸赤十字病院は、日本のみならず世界からも注目されています。

また国内の災害だけではなく、様々な国や地域で発生している大規模災害に対応すべく、神戸赤十字病院では国際救援要員の育成にも尽力し、各国に派遣しています。直近では、2018年（平成30年）にバングラデシュ人民共和国に看護師1名を派遣し、「バングラデシュ南部避難民救援事業」として保健医療活動を展開しました。

これからも地球温暖化による異常気象は世界各地で様々な災害をもたらすと予想されていますし、これに加えて国内では南海トラフ地震などいくつかの大きな地震発生リスクも危惧されているところです。こうした状況下で日本赤十字社の医療機関には、災害時における対応力の一層の強化を負託されていると考えています。また同時に平時にあっては、地域の皆さまからの信託をえて、地域の医療機関としての役割も大いに期待されています。

地域の皆さまには、神戸赤十字病院に引き続き御支援を賜りますようお願い申し上げます。そして神戸赤十字病院には、開院20周年を契機として、50年後、100年後も地域の皆さまから選ばれ続ける病院となるようさらに発展されることを祈念して、記念誌発刊に寄せる言葉といたします。

神戸赤十字病院20周年

本年は関東大震災100周年ですが、災害救護が使命の赤十字は1995年1月17日の阪神淡路大震災で、兵庫県庁前にあった旧神戸赤十字病院に全国の赤十字から救護班が参集し、災害救護の使命を果たしました。また全国の病院から救護班が派遣され、多くの人々の善意に支えられてきました。その恩返しのため西日本拠点として、HAT神戸に支部と血液センターを集約し兵庫県と手を組み、8年後の2003年8月に両病院が設立されました。県と赤十字、学閥の違う須磨と神戸のハイブリットは、病院再編の先駆けとなりました。災害医療では、秋篠宮紀子妃殿下が配備されたD-ERU等を視察された1か月後の2004年10月に台風23号による兵庫県但馬地方の洪水に救護班を派遣したのを皮切りに2005年の福知山線事故を契機に村上心療内科部長らのDMORTが発足し、ハイブリットの災害医療での集大成が2011年3月11日東日本大震災の災害医療対応でした。花巻空港でのSCU、釜石でのERU、戸田整形外科部長の近衛社長への直訴、DMATの釜石病院支援とコインシデントもありました。

初代小川恭一院長は、孟子のいう天の時に倣いHAT神戸から世界に発信と高い理想を掲げられ、その成果として2008年の山口、杉本、森放射線科医師らによる大動脈損傷8例のステント治療の良好な短期成績のAnn Thorac Surg報告。2009年伊藤整形外科部長らの79例の脊髄損傷患者に対するステロイドの大量投与は有害とのSPINEの報告が脊髄損傷ガイドラインCLASS IIの引用文献トップ。2011年築部・林ら心臓血管外科の181例A型急性大動脈解離のうちComaを伴った21例は、5時間以内に手術場に搬送され、66%が社会復帰したCirculationの報告は、従来手術適応外であったのが早期に手術を施行すれば、回復する可能性がある。と新たなエビデンス。高岡、土井、五十嵐らの循環器内科は、ECPRによる心肺蘇生からICD植え込みルートを確立し、症例数成績とも日本のトップクラス等です。

2代守殿貞夫院長は地の利、地域から選ばれる病院、職員が働いてよかった病院を掲げられ、医業収益黒字化を成し遂げられました。

売り家と唐様で書く3代目で須磨診療所を売ったわたくしは、メンデル分離の法則が出始める時期、人の和を掲げ、各科の垣根を撤廃すべくセンター制を導入しました。須磨ルーツの藤井、白坂、黒田内科部長と神戸ルーツの門脇、石堂外科部長らの消化器センターは、多数、優秀な人材を育成し、研修のメッカとなりました。

初代創傷治療センター長に田原真也神戸大学形成外科教授を招き、4代目院長に引き継ぎました。

5代山下晴央院長は、脳神経外科業務を創業メンバーで頸椎損傷の椎骨動脈解離塞栓、脳梗塞のTPAプラス血管内治療を確立した原部長にまかせ、COVID-19対応しながら、築部、土井副院長とともに、補助金なしで医業収益黒字化を成し遂げ、創業は易く守勢は難しという言葉を噛みしめながら頑張っておられます。さらなる発展を期待しています。



第3代院長
小澤 修一



第4代院長
田原 真也

神戸日赤での思い出

開院20周年おめでとうございます。

2012年に神戸大学を定年退職すると同時に、当時2代目病院長であった守殿先生に声をかけて頂き、新たに形成外科を開設して頂いてその部長として入職させて頂きました。私の専門は形成外科のなかでも再建外科の領域でした。併設の兵庫県災害医療センターから重度外傷後の再建を多数経験させて頂きました。神戸大学で主に経験してきた癌切除後の再建とは少し異なる症例、特に若年の患者さんはその予後も含めて、今でも強く印象に残っています。神戸日赤には6年間お世話になりました。2018年3月に人生2度目の定年退職を迎えてからはや5年が過ぎています。昨年（2022年）10月には満75歳の誕生日を迎え、晴れて後期高齢者となりました。若い頃に想像していたほどの感慨は感じませんが、病気らしい病気も知らず、この歳まで無事に生きてこられたのは、ただ有難く、今更ながら、両親に感謝するのみです。長生きの秘訣に「先祖を選べ」というのがありますが、まさにいい祖先を選べたと思います。

折に触れて「老後をどう過ごすか」と、ぼんやり考えたことは何度もありましたが、具体的にこれだという目標を定めたことはなく、曖昧に考えて自然の流れに身を任せてきました。ただ私の場合、幸いにも職業と趣味がたまたま一致したというのか、臨床に携わっているとき、特に手術をしている時が何より楽しく感じます。これはかつて20代で形成外科に入局した時から神戸大学、神戸日赤、さらに現在に至るまで少しも変わらない実感です。いい職業に着けたものだとずっと感じています。根っからの職人気質なのでしょう。逆に管理職は大の苦手です。年齢を重ねるにつれ、臨床現場から遠ざかって、管理の仕事が増えていくのは世の常なのですが、どうにも私には重荷でした。2016年から2年間神戸日赤病院長を勤めさせて頂きましたが、病院の発展に何ら貢献することもなく定年を迎えてしまったことを今も心苦しく思っています。逆に不適合な院長が大過なく過ごすことができたのは、事務方はじめ診療面でも優秀なスタッフに恵まれたからと皆様に感謝申し上げる次第です。

昨年後期高齢者への仲間入りを機に一切の管理職を辞して、大阪にある個人経営の美容外科クリニックにいち従業員として雇用してもらいました。まさに現場復帰とリスクリングのチャンスを手に入れました。日々新鮮な気持ちで通勤しています。永年培ってきた自分の技術がひとりひとりの患者さんの幸せに直結するよう、また拾ってもらったクリニックと互いにウィンウィンの関係になれるよう健康寿命を維持しつつリスクリングに励んでいます。

お世話になった神戸赤十字病院が次の20年、さらに100年と発展が続きますよう陰ながらお祈り申し上げます。

神戸赤十字病院での思い出



元看護部長
呉竹 礼子

このたび神戸赤十字病院が開院20周年の節目を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

私が神戸赤十字病院で勤務させていただいたのは、2011年4月～2014年3月までのわずか3年間です。守殿院長をはじめ職員のみなさまには、看護部長として未経験の私を受け入れていただけたことに感謝申し上げます。

2011年3月11日は戦後最大といわれる自然災害、東日本大震災をもたらした巨大地震が発生しました。その日は私にとっては長浜赤十字病院での最期の管理夜勤の日で院内での災害対策本部の立ち上げ、救護班の派遣準備と派遣に迫られたことを思い出します。その20日後には神戸赤十字病院看護部長として就任ということになりました。

東日本大震災の救護班派遣は神戸赤十字病院でも行われており、救護派遣されたまだ会ったことのないスタッフたちの出迎えと見送りを繰り返していたこと、災害時の赤十字の団結力の大きさを身に染みて感じました。また、神戸は1995年に阪神淡路大震災を経験しているということもあり、災害時救護派遣に対しては、恩返しともいえる強い熱意を感じました。

神戸と長浜では地域は全く違いますが、「赤十字の理念、提供する医療・看護」は同じと自分自身に言い聞かせて頑張ろうという思いでした。長浜での経験を神戸で活かせることは活かしたいと思いました。経営状況が悪く指定病院であったこと、看護師の離職率の高さなど課題は山積みでしたが、経営状況は徐々に回復し2014年にはDPCⅡ群病院に指定されたことは思い出の一つとなっています。

単身赴任での神戸への転勤ではありましたが、土日には長浜に帰省し、また、月曜日から神戸で過ごすといった生活でした。2年目の2012年4月には兵庫県立大学大学院経営研究科医療マネジメントコースに入学し、病院経営の勉強に時間を費やしました。しかし、大学院での学びと共に同じ目標を持った人たちとの貴重な時間を共にできたことで、他施設・他職種の方々とのネットワークが築けたことなどたくさん得るものがありました。神戸赤十字病院では、たくさん得た情報をもとに看護部活動を活性化させ、さらには築部先生をはじめ有志での経営の勉強会でいろいろな意見を出し合ったこと、院長に意見したことなども大切な思い出となっています。

看護部長就任中、ご支援、ご指導をいただいた多くの方々に感謝の気持ちが沸き上がってまいります。楽しい3年間をありがとうございました。最後になりましたが、神戸赤十字病院の益々の発展を祈念いたします。

神戸赤十字病院 開院20周年に寄せて



元看護部長
天野 智子

私は須磨赤十字病院から新病院開設準備室を経て、神戸赤十字病院で勤務しました。新病院開設準備室に配属されたのは1999年9月のことでした。当時は、赤十字と県が合築という形でひとつの病院を建設するという前例がなく、しかも神戸赤十字病院と須磨赤十字病院が合併した上でのことでしたので、いくつもの障壁が立ちはだかり、紆余曲折の連続でした。新病院開設準備室解散の危機を乗り越え、看護管理者が県内外の病院で研修を受けて準備状況を整え、また他の赤十字病院から看護管理者の応援派遣を受けて、2003年8月の開院を迎えました。

2020年3月まで、私が在籍した17年間を振り返ると、お世話になった多くの人の顔や忘れられない出来事が浮かんできます。いずれも忘れ難い思い出ですが、その中でも感慨深かったことは、看護部長として初めて救護班を送り出した2016年の熊本地震と、2015年のケニアへの国際救援要員派遣です。2011年の東日本大震災は、自身も救護班の一員として2回の救護活動を経験し、国際救援要員としてケニアとスマトラで活動経験がありました。自身の活動中には余震や二次災害の危険があっても、命の危険や不安はあまり感じませんでした。看護部長として送り出す側に立ってみますと、不安と恐怖と緊張の連続で、とにかく無事で帰ってきてくれますようにと、祈るような毎日でした。

日本の赤十字病院は、救護看護師の育成を目的としてスタートしました。救護看護師の育成を通して、質の高い看護を提供できる看護師の育成を続けていると言えます。神戸赤十字病院は中規模ながら国内外の救護活動を志す看護師が多く、その研鑽を続ける姿勢が全体に良い刺激を与え、救護活動を支えるマインドを醸成していたのだと思います。

赤十字の伝統を引き継ぎながら、新しいことに挑戦し続ける職員と、その挑戦を支え続ける職員の皆様に心から敬意を表しつつ、神戸赤十字病院のますますの発展を祈念いたします。

開設20周年に寄せて



元事務部長
中島 功次

神戸赤十字病院開設20周年、おめでとうございます。

私は2013年4月から2019年3月まで勤務させていただきましたが、初年度が開設10周年であったことを懐かしく思い出します。

それまで勤務していた公立病院と違い、補助金等がない赤十字病院の経営環境は大変厳しく、なかでも設立の経緯から多額の負債があった神戸赤十字病院は、これを減少させつつ安定した経営を維持していくという難しい課題がありました。そのためには職員一人ひとりに経営意識を持っていただくことが重要であろうと考え、歴代の院長先生方のご指導のもとに様々な会議等を通じて経営意識の醸成を試みるとともに、可能な限り本社や支部・病院間の積極的な人事交流を図りましたが、私の努力不足で十分な成果が果たせなかったことは今でも悔いが残るところです。

また、開設時の長期経営計画の見直しを当時の井戸支部長と議論させていただいたり、県の地域医療構想に基づくいわゆる「2025年プラン」の策定にも携わらせていただきました。また須磨診療所の閉院や、重点支援病院の指定を回避すべく資金繰りに頭を悩ませたことも懐かしい思い出です。

そんな中でも一番の思い出としては、私事ですが緊急カテで入院となったことです。数日前からの胸痛を循環器内科の先生に相談させていただいたところ、救急外来からあれよあれよと言う間にカテ室での緊急検査・ステント留置と進み、そのまま入院となりました。

私にとっては人生初の入院でしたが、神戸赤十字病院の医療の質の高さと、職員の皆様のモチベーションの高さを実感させていただく貴重な経験になりました。

この度、開設20周年を迎えられましたのも、諸先輩方をはじめ職員の皆様の不断の努力の賜であろうと心から敬意を表する次第であり、今後も地域から選ばれる病院として、ますますのご発展を祈念いたします。



元事務部長
今井 明
現県立尼崎総合医療センター参与
(地域医療連携担当)

神戸赤十字病院が開設20周年を迎え、ここに記念誌を発刊されますことは、誠に意義深く、心からお祝い申し上げます。私は、2019年4月から2022年3月まで勤務させていただきました。それまで兵庫県で38年間勤務し定年退職の上、県とは違った環境で勤務することで、着任の日は、それぞれ初めて社会人となったような気分で、最初は緊張の連続、戸惑うことも多かったと思います。

しかし、山下院長はじめ神戸赤十字病院の皆様にご温かく支えていただき、無事に務めさせて頂いたのかと思います。事務部長として、なによりも気になったのが、神戸赤十字病院の経営状況でした。開院時にあたっての多額の負債があるとともに、開院以来一定の時期を除いて、継続した赤字の状況が続いており、なかなかトンネルの先が見えないものであり、経営改善に苦悶していた一年目でした。そのような中、2020年4月以降病院での新型コロナ対応があり、クラスター発生、4月13日から外来受付もお断りすることとなってしまいました。連日のコロナ対応で、特に、松本看護部長とは、「なぜか、金曜日の夕方に、コロナ発生がありますね」とお互い嘆いていたという記憶があります。しかし、連日のコロナ対策会議では、山下院長、土井副院長はじめ職員一丸となって二度とクラスターを発生させないという強い気概を持って非常なご努力をされたところでした。

コロナ対応に追い打ちをかけるように、2020年7月には、日赤本社より「重点支援病院」の指定を受ける羽目になってしまいました。本社からは、いかにキャッシュフローの充実を図ること、診療単価の向上、患者確保等が求められました。私自身、なかなか早急に改善することは無理と考えていましたが、築部副院長を中心とした経営企画部会にて、開業医訪問、断り事例の分析等熱心なご努力により、医療収支黒字額が赤十字病院でベスト10入りを実現させ、この難関を乗り越えていただきました。結びに、この度の開設20周年を契機として、病院の基本方針として掲げられている安心と満足の医療の提供のため、なお一層ご尽力賜りますようお願い申し上げますとともに、神戸赤十字病院が益々ご発展されることを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

神戸赤十字病院から 始まった医者人生

整形外科副部長
森田 卓也



2007年大阪市立大学（現：大阪公立大学）医学部医学科卒業し、この神戸赤十字病院で初期研修医として、また社会人1年目として働きだした森田卓也と申します。生まれてこの方神戸市灘区から出たことがありませんでしたので神戸市内の病院での研修を希望し、運良く就職することができました。学生時代より外科系志望であった自分ですが、初期研修2年間で様々な科をローテートし、各科指導医の先生が非常に優しく、また見守りながら様々な手技をさせて頂き、全く考えていなかった内科系にも心がなびくことが多々ありました。しかしながら自分の進路は決めなければいけませんので、流れと言ってしまうのが悪いですが、部長の圧というところから言葉が悪いですが、研修医2年目で整形外科となることを決意致しました。そのまま後期研修医、スタッフと気づけば研修医から7年働かせて頂きました。そして、当院整形外科が岡山大学の医局でしたので大学院に行くため32年間住んでいた灘区から人生で初めて岡山という見ず知らずの土地に行き、無事卒業し2019年から再度神戸赤十字病院に戻ることができました。

初期研修医は昔から今でも6人ですが、自分の年は5人が女性で男1人という奇跡の学年でした。しかしながら非常に仲良く、笑いが絶えず、時には涙を拭きあい励ましあった仲で、今でも馬鹿話ができる最高の仲間に出会えました。さらにはこの病院で出会えた後輩や先輩もかけがえのない存在で、十年以上経っても仲良くさせてもらっています。また、研修医から後期研修医と専門性が上がりますが、当院は各科の垣根が無く、整形外科となっても他科の先生方ともコミュニケーションはとりやすく、患者さんのことで泣きついても嫌な顔せず診て下さる、それは患者さんにとっても最高の環境であると考えられ、本当にこの病院で働いて良かったとしか思えません。

医師として必要なことは初期研修医の間に学び、今でも生かされていると思っています。

一つ、職員・患者さんへの挨拶をする。コミュニケーションというのは我々医療職にとって非常に重要であるため、できる限り行うよう努めています。

二つ、患者さんfirstで考える。患者さんにとって何がベストな治療かを考え、時代錯誤かもしれませんが…そのためなら夜中であろうが、どんだけ疲れていようがベストな治療を行うことを心掛けています。

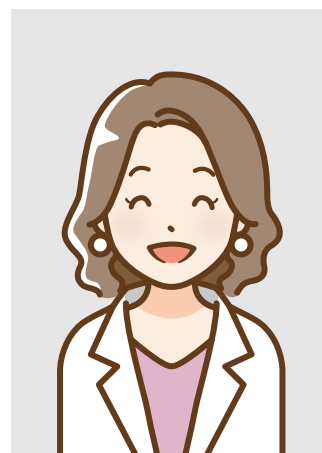
三つ、周りの人が笑顔になれるような環境を作る。仕事は一人ではできませんので、周囲の皆様の助けを借りて、もしくは自分が助けとなり支えあい仕事を行っているということを忘れずに、職場の皆さんと楽しく仕事をすることが患者さんのためにもなると思っています。

医者として、社会人として初めての門出をこの神戸赤十字病院で迎えられたことは、自分にとって本当に良かったと心から思います。今後もこの神戸赤十字病院を盛り上げるべく誠心誠意患者さんに向き合っていこうと思います。転勤が無ければ☆

20周年に寄せて

循環器内科副部長

田原 奈津子



20周年おめでとうございます。

私は同期と共に神戸赤十字病院で、社会人として医師としての道を歩みはじめました。ご縁があって、いま再びお世話になっています。

いくつかの病院を経て感じた良いところはたくさんありますが、一番はスタッフ間のコミュニケーションが取りやすいことではないかと思います。ひよっこの時も歳を重ねたいまも変わらず、先輩・後輩の先生方はもちろんのこと、看護師さん、技師さん、もちろん事務の方々にも多くのことを教えてもらい、助けていただいています。円滑な人間関係が生み出すよい働きは患者さんにとっても大切なことのひとつであると思うのです。これからもぜひ変わらずそうあって欲しいと願っています。

働き方改革という言葉を目にしてからしばらく経ちますが、医療や病院に対する世の中のイメージはそう簡単には変わらず。しかし杓子定規には行かないところも含め、やり甲斐のある仕事であることはこれからも変わらないのではと思っています。

とはいえ、誰のココロもカラダも等しく大切なのは間違いなく、時代が変わっても、患者さんも働くスタッフも皆がよしと思える病院であり続けてほしいと思います。

20歳、改めておめでとうございます。不惑を超えてさらに先まで、ますますのご発展をお祈り申し上げます。